

2019 年度 卒業生アンケート
「東京女子大学の教育ならびに卒業生の就業状況に関する調査」
集計結果報告

2021 年 3 月

東京女子大学 自己点検・評価委員会

2019年度卒業生アンケート「東京女子大学の教育ならびに卒業生の就業状況に関する調査」 集計結果報告

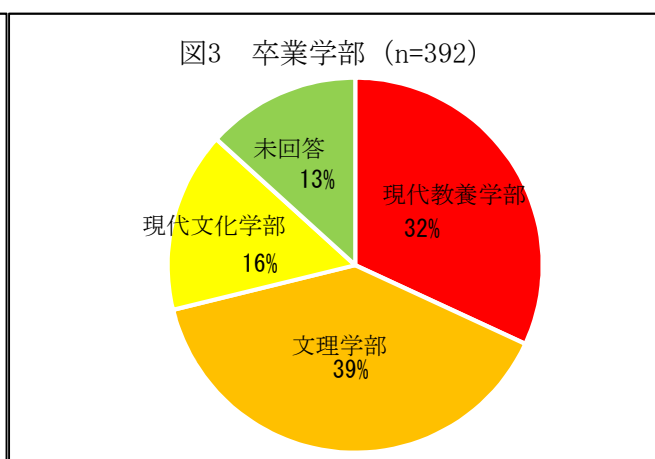
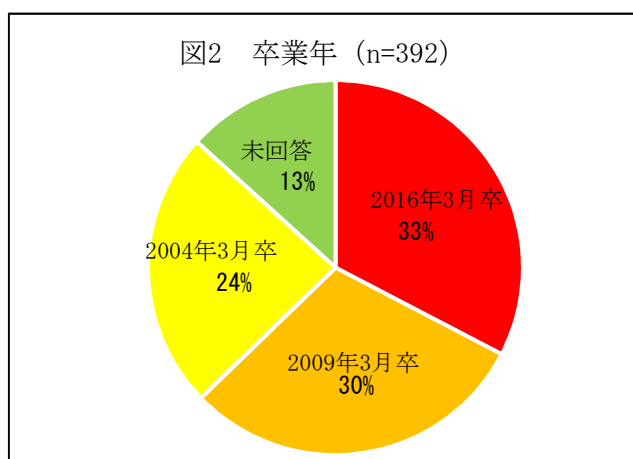
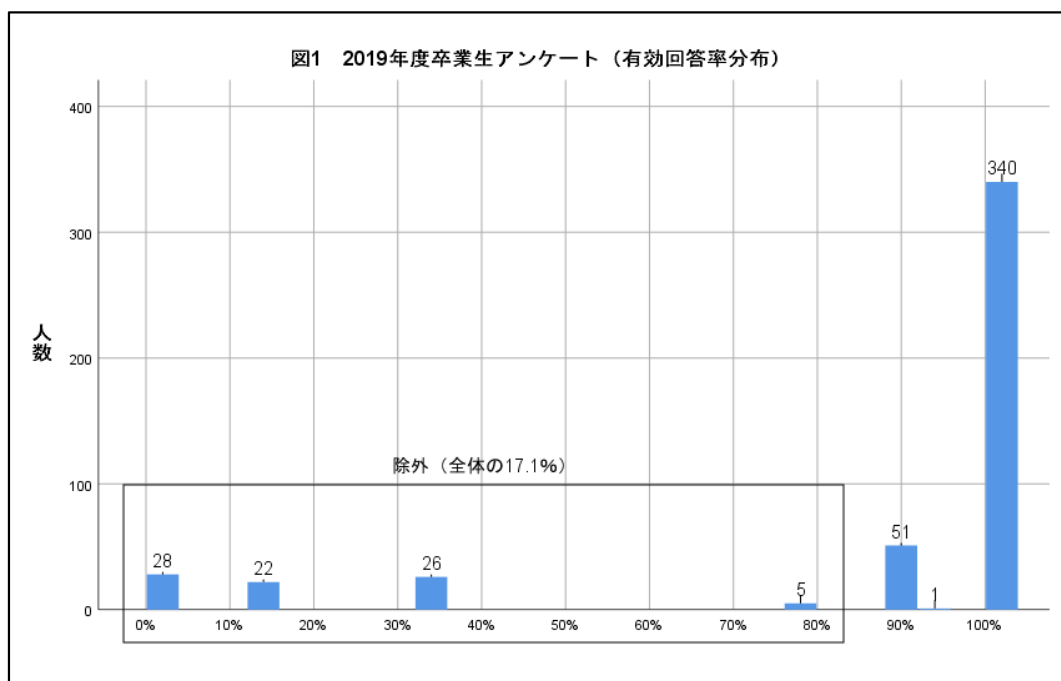
1. 実施概要

- ・調査対象者 2016年3月卒（886名）、2009年3月卒（792名）、2004年3月卒（758名）
- ・調査実施期間 2019年11月12日～12月18日
- ・調査方法 Web調査（対象年の卒業生へはがきを送付し、回答を依頼）
- ・回答者 502名
- ・有効回答者 392名

- ・卒業年対象外（10名）および重複回答（19名）を除外
- ・有効回答率が8割未満のもの（81名）を除外（図1）

内訳 2016年3月卒128名、2009年3月卒118名、2004年3月卒94名

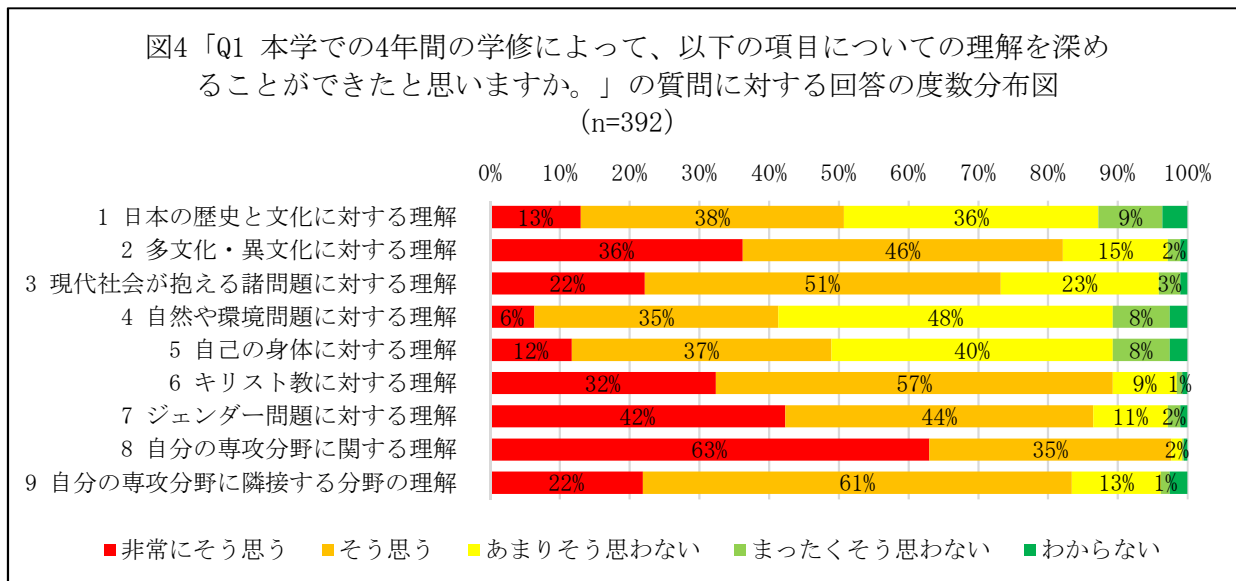
現代教養学部125名、文理学部154名、現代文化学部61名、卒業年・学部未回答52名



2. 集計・分析結果

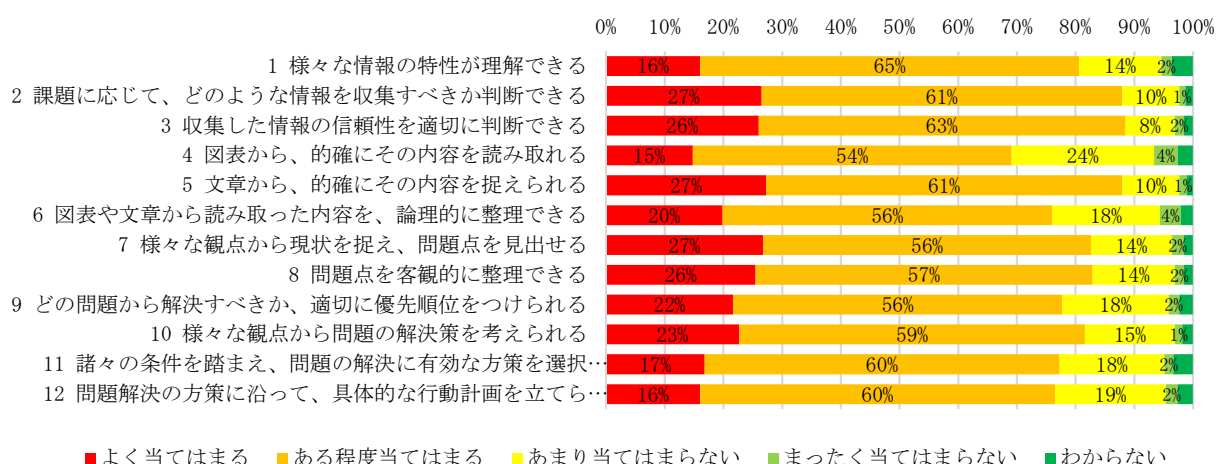
2.1 本学4年間の学修について

①「Q1. 本学での4年間の学修によって、以下の項目についての理解を深めることができましたか。」の質問に対する回答の度数分布図である（図4）。本学の4年間の学修で「自分の専攻分野に関する理解」を深めることができましたと回答する卒業生が最も多かった。その他「多文化・異文化に対する理解」「キリスト教に対する理解」「ジェンダー問題に対する理解」「自分の専攻分野に隣接する分野の理解」についても、昨年度の調査に引き続き卒業生の多くが、4年間の学修で深めることができましたと回答した。



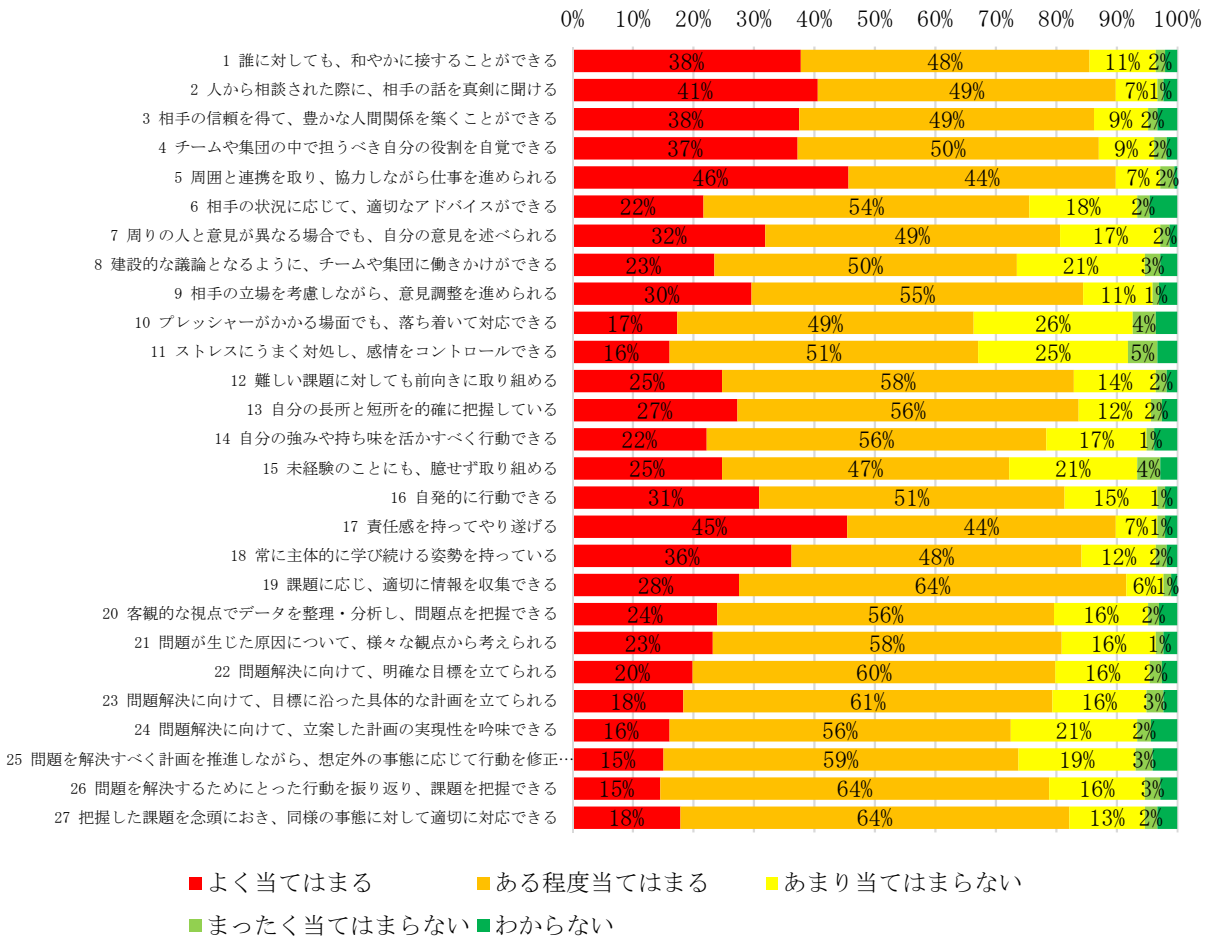
②図 5 は「Q2. 本学での学修によって身についた能力として、以下の項目はどの程度当てはまりますか。」の質問に対する回答結果である。「4 図表から、的確にその内容を読み取れる」「6 図表や文章から読み取った内容を、論理的に整理できる」「9 どの問題から解決すべきか、適切に優先順位をつけられる」「11 諸々の条件を踏まえ問題の解決に有効な方策を選択できる」「12 問題解決の方策に沿って、具体的な行動計画を立てられる」の除いた項目で、「よく当てはまる」「ある程度当てはまる」と回答した人が 8 割を超えた。

図5 「Q2 本学での学修によって身についた能力として、以下の項目はどの程度当てはまりますか。」の質問に対する回答の度数分布図 (n=392)

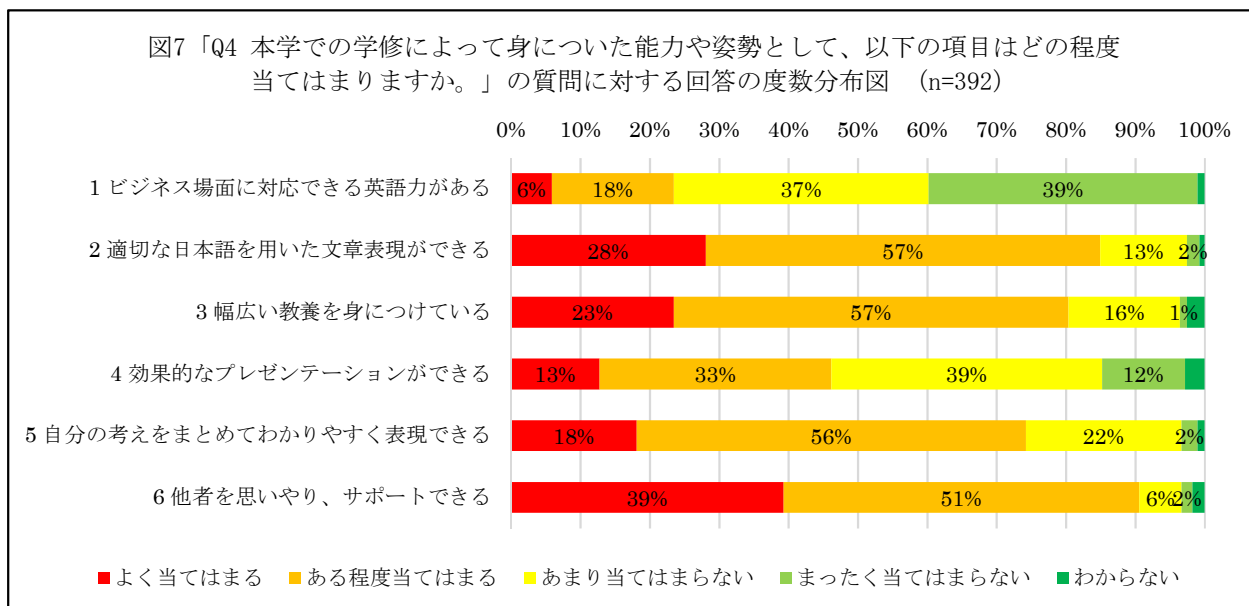


③「Q3. 本学での学修によって身についたスキルや能力として、以下の項目はどの程度当てはまりますか。」の質問に対する回答者分布を図6に示す。「2 人から相談された際に、相手の話を真剣に聞ける」「5 周囲と連携を取り協力しながら仕事を進められる」「17 責任感を持ってやり遂げる」の3項目で、「よく当てはまる」と回答した卒業生が4割を超えた。

図6 「Q3 本学での学修によって身についたスキルや能力として、以下の項目はどの程度当てはまりますか。」の質問に対する回答の度数分布図 (n=392)

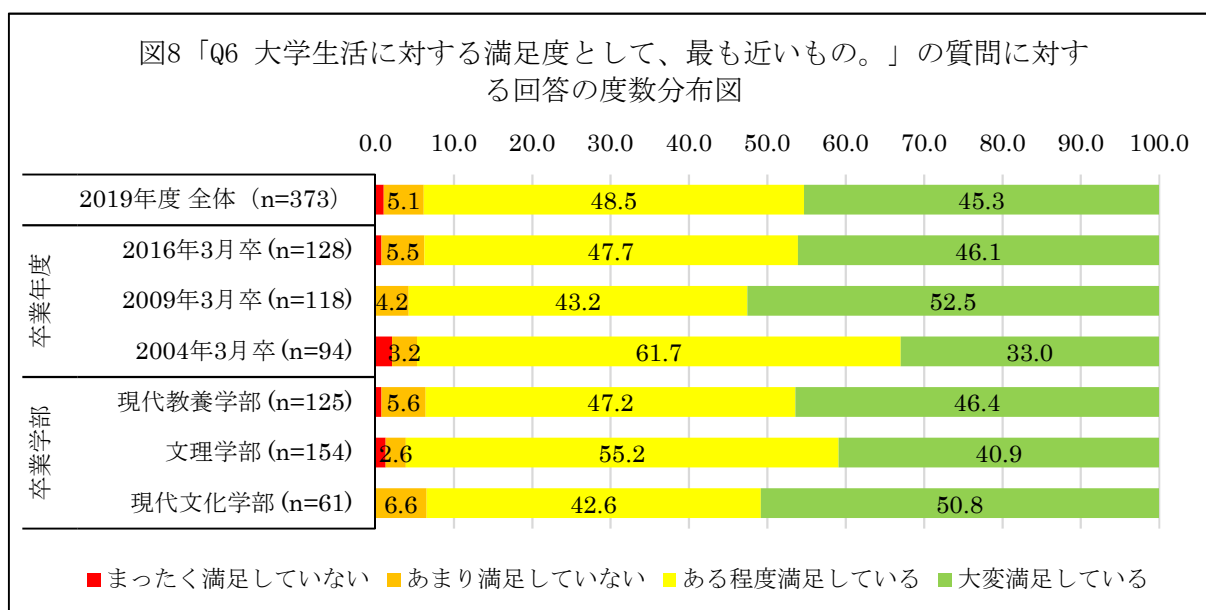


④「Q4. 本学での学修によって身についた能力や姿勢として、以下の項目はどの程度当てはまりますか。」の質問に対する回答分布は以下の通りである。「6 他者を思いやり、サポートできる」がよく「当てはまる」と回答した割合(39%)が最も高く、続いて「2 適切な日本語を用いた文章表現ができる」(28%)、「3 幅広い教養を身につけている」(23%)の順で高かった。一方、「1 ビジネス場面に対応できる英語力がある」(6%)、「4 効果的なプレゼンテーションができる」(13%)を当てはまると回答した人は少なかった。



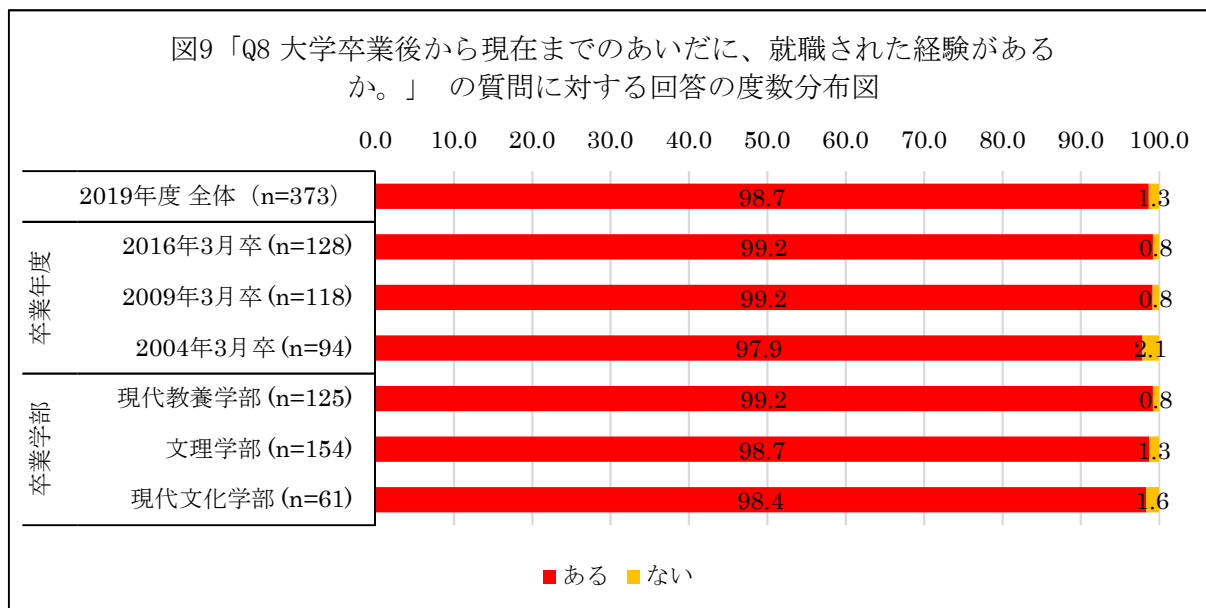
2.2 大学生活の満足度

「大変満足している」が45.3%で、「ある程度満足している」(48.5%)を加えると9割以上が満足していると回答していた。



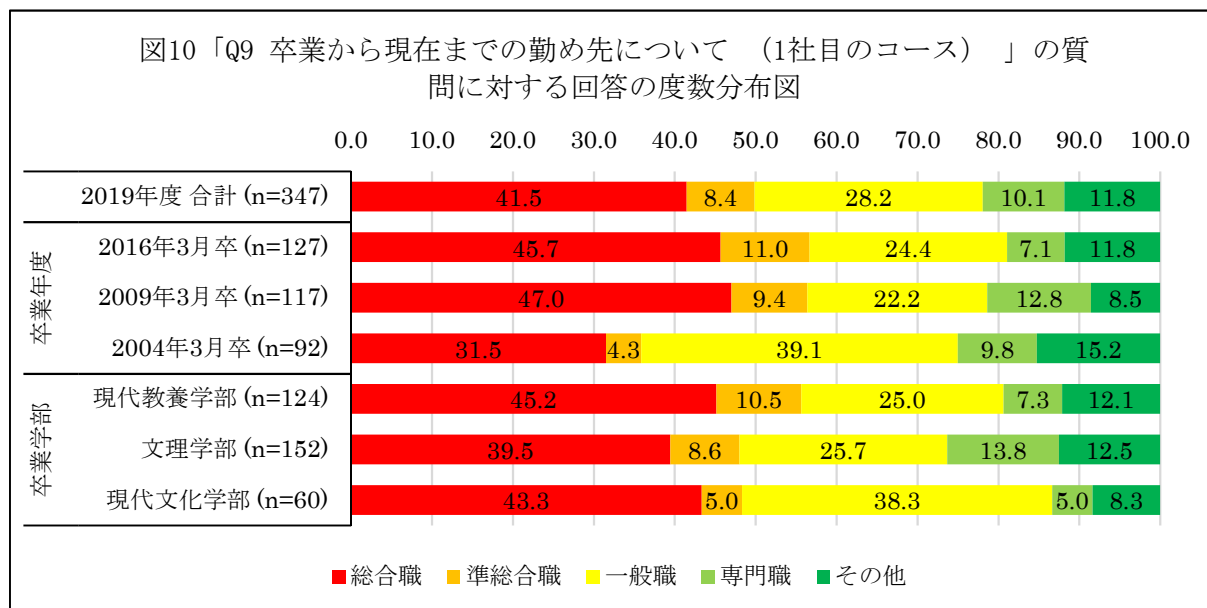
2.3 就業状況

①就業経験については、ほぼ全ての人があると回答していた。

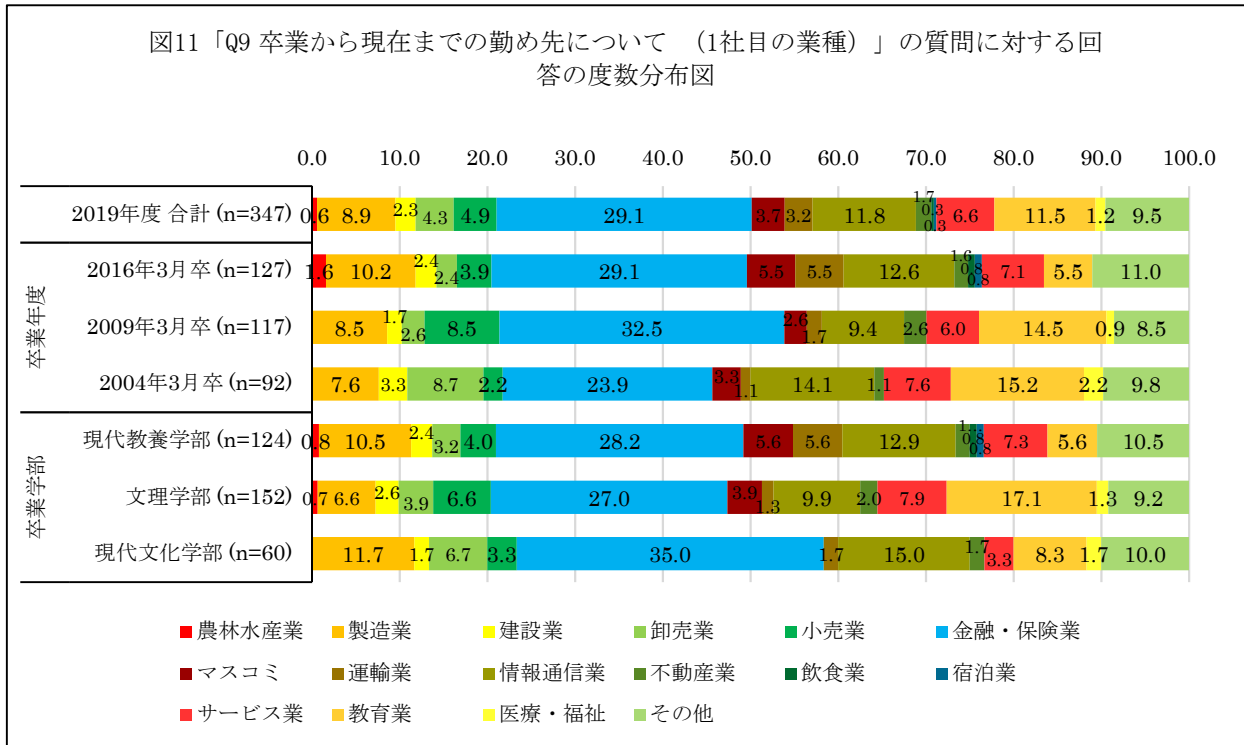


②就業先のコース（1社目）について

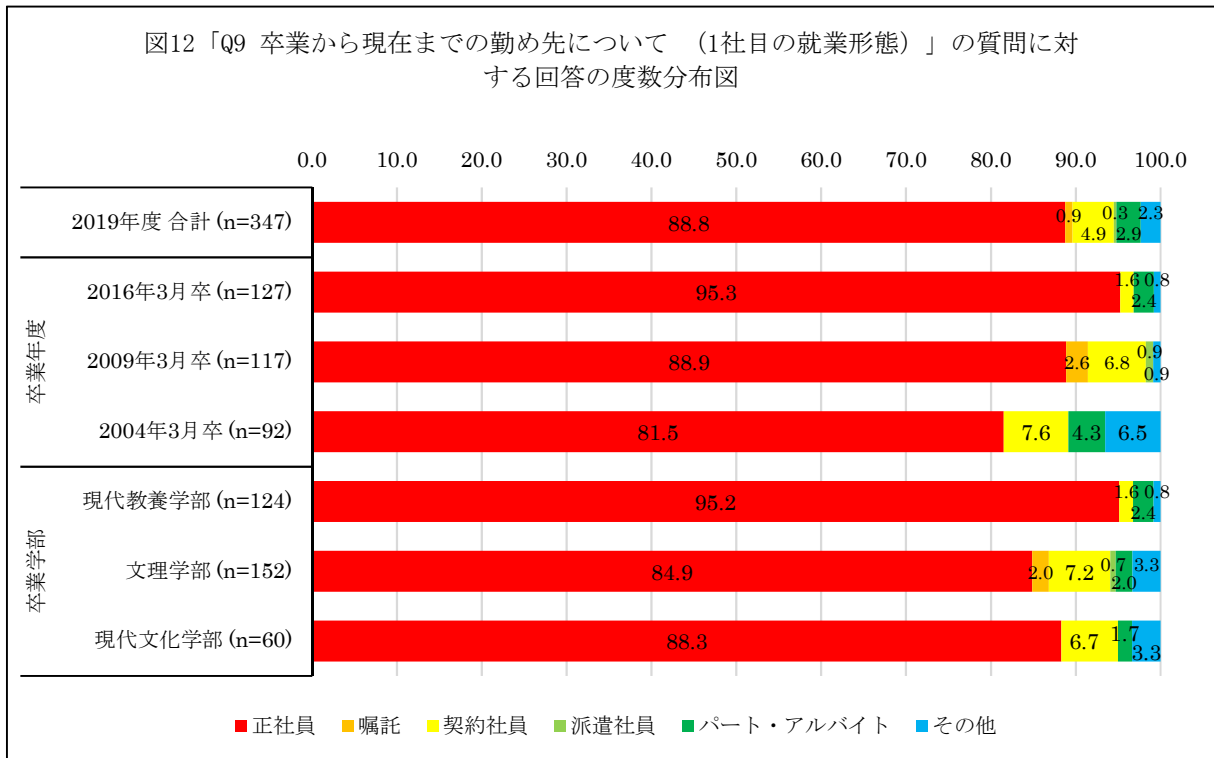
総合職が最も高く（41.5%）、ついで一般職（28.2%）であった。



③就職先(1社目)の業種は、「金融・保険業」が最も高く(29.1%)、続いて「情報通信業」(11.8%)、「教育業」(11.5%)の順で高かった。



④就職先(1社目)の就業形態は、正社員が88.8%で最も高く、ついで契約社員(4.9%)であった。卒業年別で見ると、卒業時期が新しいほど正社員の割合が高い。また、契約社員の割合が、2016年3月卒よりも(1.6%)、他の時期に卒業した人の割合の方が高い(2009年3月卒6.8%、2004年3月卒7.6%)。



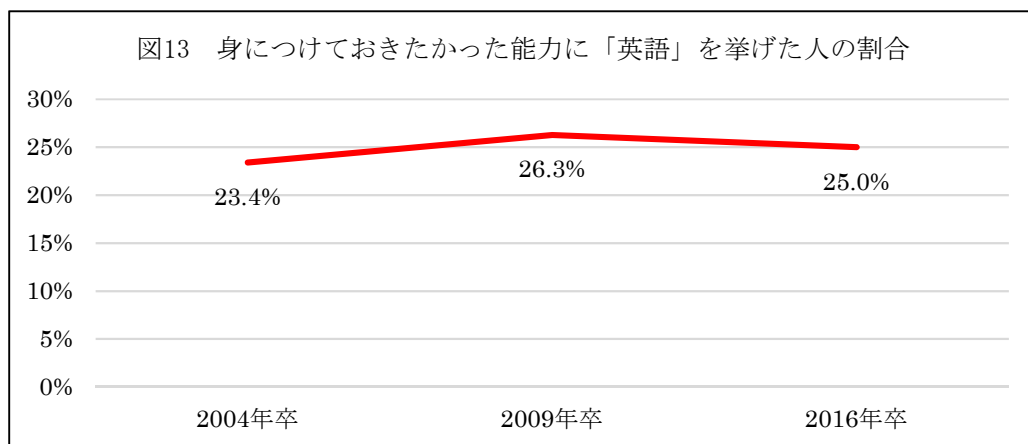
2.4 身につけておきたかった能力（自由記述）

身につけておきたかった能力の自由記述は 265 件あった。卒業生が「身につけておきたかった能力」として、どのようなものが多く挙げられているか調べるため、全ての自由記述テキストデータを KH Coder に読み込み、出現回数が多い順に 150 語を抽出した（表 1）。出現カウントは名詞に限定した。「英語」が最も多く出現し、同様の意味を持つと思われる「英会話」「語学」も多く出現している。

表 1 出現回数の多い単語（名詞）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
英語	67	キリスト教	3	数学	2	基礎	1	状態	1
能力	55	ストレス	3	世界	2	気持ち	1	職業	1
スキル	31	マナー	3	世代	2	技術	1	心理	1
英会話	24	課題	3	他者	2	技能	1	親元	1
語学	21	課程	3	耐性	2	教師	1	進め方	1
ビジネス	20	環境	3	大学	2	具体	1	人間	1
プレゼンテーション	18	関わり	3	大学生	2	憲法	1	人権	1
社会	18	基本	3	中心	2	見解	1	性格	1
コミュニケーション	15	自己	3	物事	2	現実	1	生き方	1
自分	15	場面	3	文化	2	考え	1	税制	1
外国	14	専門	3	文学	2	行事	1	先輩	1
知識	12	男性	3	文系	2	高慢	1	戦略	1
経済	10	日常	3	保険	2	国際	1	選択肢	1
教養	9	付き合い	3	理数	2	財務諸表	1	全般	1
論理	8	歴史	3	ガソリン	1	姿勢	1	相手	1
パソコン	7	カード	2	ギャップ	1	自身	1	対人	1
機会	7	カリキュラム	2	コンピューター	1	自発	1	単位	1
お金	6	クレジットカード	2	シーン	1	実家	1	短所	1
資格	6	パワー	2	セルフ	1	実務	1	地方	1
文章	6	ポイント	2	データ	1	手持ち	1	長期	1
情報	5	マーケティング	2	バイト	1	手前	1	長所	1
政治	5	マクロ	2	ファッション	1	手法	1	程度	1
イングリッシュ	4	学科	2	プロジェクト	1	受け身	1	哲学	1
キャリア	4	企業	2	ペース	1	周り	1	点数	1
一般	4	教員	2	リーダーシップ	1	宗教	1	読み方	1
科目	4	見方	2	レベル	1	集団	1	年間	1
使い方	4	考え方	2	ローン	1	書き方	1		
積極	4	仕組み	2	ワード	1	書式	1		
中国語	4	視点	2	英文	1	女性	1		
日本語	4	情勢	2	過程	1	小遣い	1		
分野	4	人脈	2	学外	1	常識	1		

最も多く出現した「英語」について、卒業年ごとにカウントし、何割が「英語」と挙げているかを比較した（図 13）。どの卒業年の中で大きな差はみられず、一定数回答があることは今後の課題である。



次に、「ビジネス」を含む回答が、「英語」とそれらに関連する単語に次いで上位に来ている。「ビジネス」がどのような単語と結びついて出現しているかを調べるため、KH Coder を用いて階層的クラスター分析を行った。前処理として、1単語になるものの定義を行った（「キャリアイングリッシュ」で1単語）。分析に際しては、最小出現回数を3、距離の指数を Jaccard、クラスター間距離の測定方法を Ward 法に設定した。その結果を図 14 と図 15 に示す。

現代教養学部においては、「ビジネス」－「文章」、文理学部・現代文化学部では「ビジネス」－「英語」での結びつきが見られた。「ビジネス」という言葉自体が広い意味を持つ言葉のため、どのような意味での「ビジネス」なのか引き続き考察を進めていきたい。

図 14 階層的クラスター分析結果（現代教養学部）

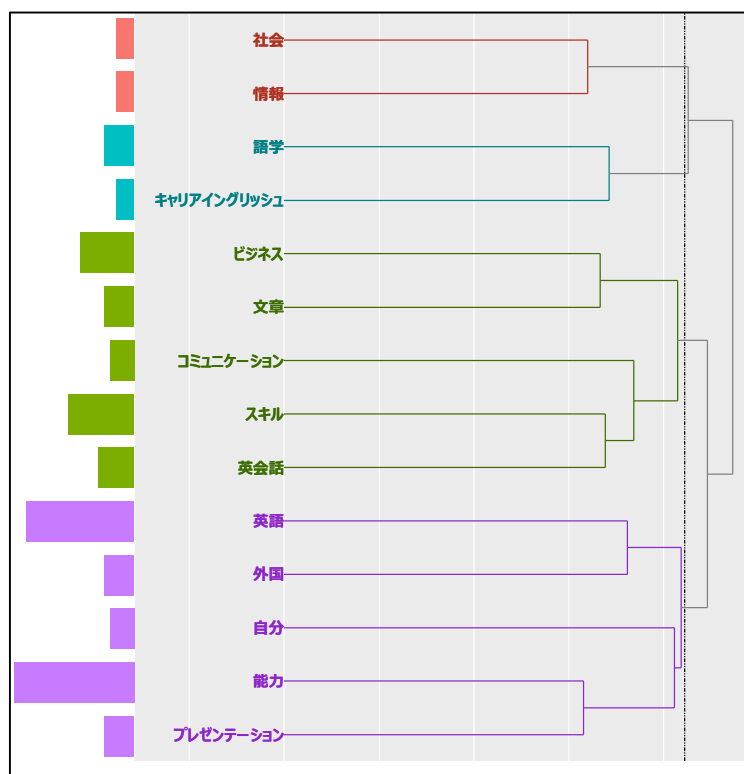
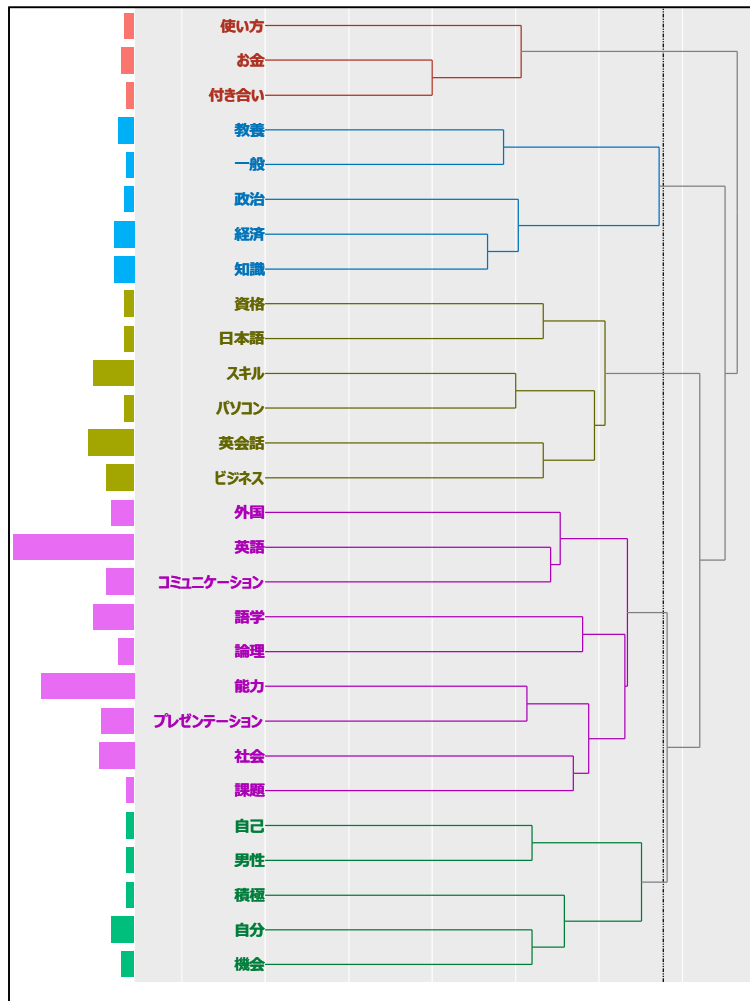


図 15 階層的クラスター分析結果（現代文化学部、文理学部）

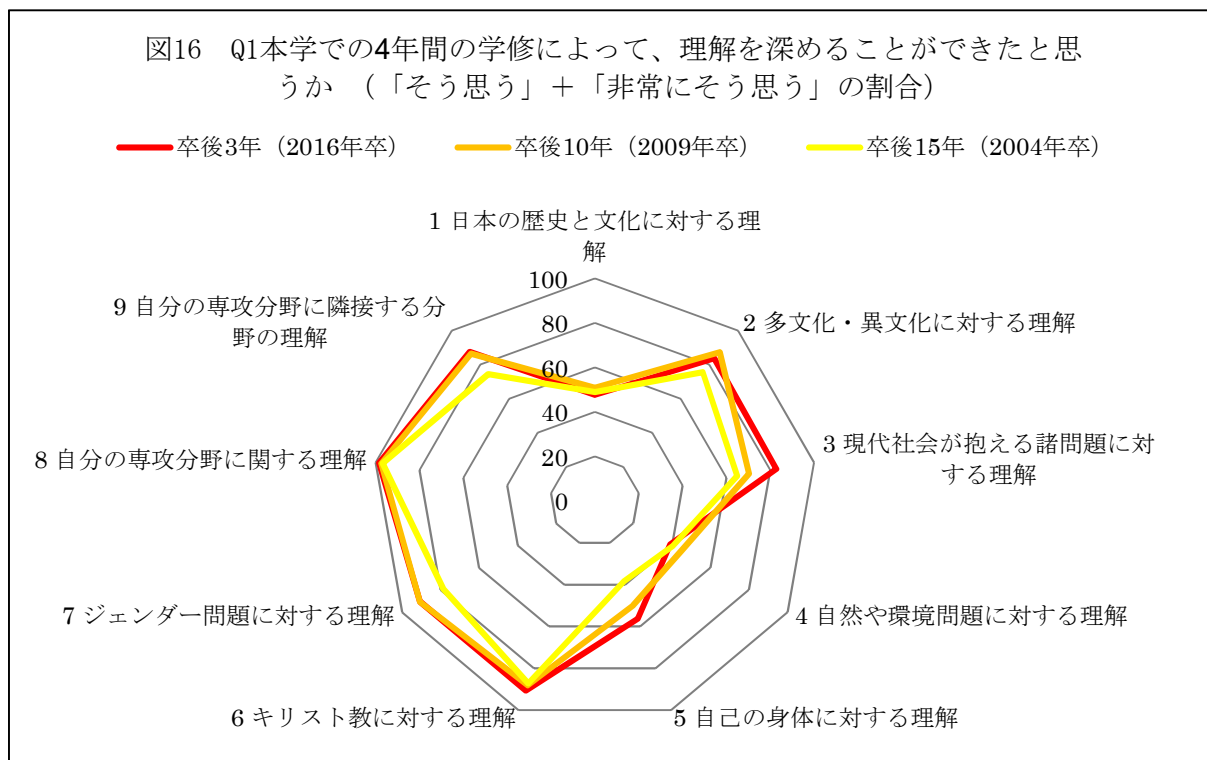


3. 卒後比較

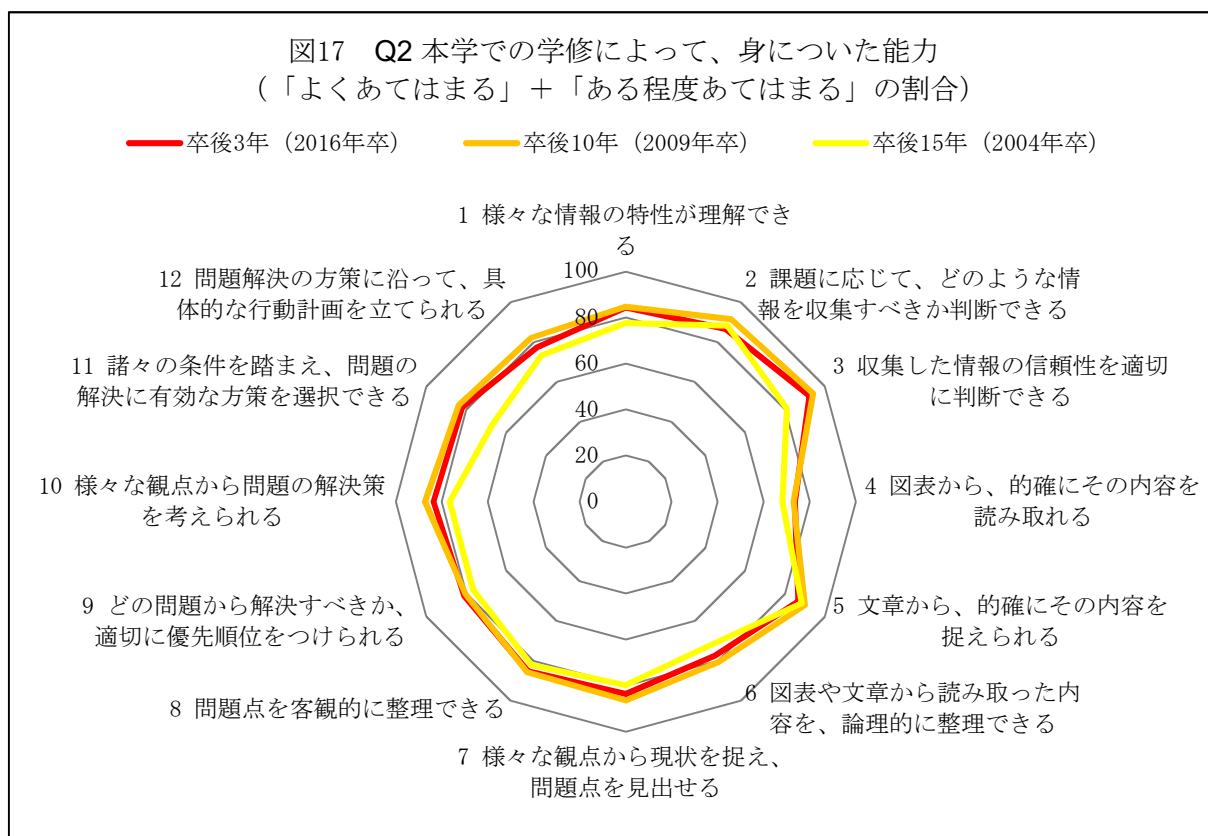
3.1 選択式回答の比較

卒業年毎の傾向を比較するため、各設問の卒業年毎のレーダーチャートを作成した（図16～19）。

① Q1「3 現代社会が抱える諸問題に対する理解」については、特に卒後3年の比較的最近卒業した卒業生が深めることができたという傾向にあった。また、「1. 日本の歴史と文化に対する理解」、「4 自然や環境問題に対する理解」については、どの卒業年においても深めることができたという割合が低かった。特に「自然や環境問題に対する理解」は、SDGs への社会的な意識が高まる中で、これらに関する理解を深められるような教育の展開が課題である。



②Q2の能力については、卒後3年と卒後10年の卒業生が身につける事ができたと回答する割合が高い。



③Q3は、卒業年後の大きな違いは認められず、その卒業年次も同じような回答であった。

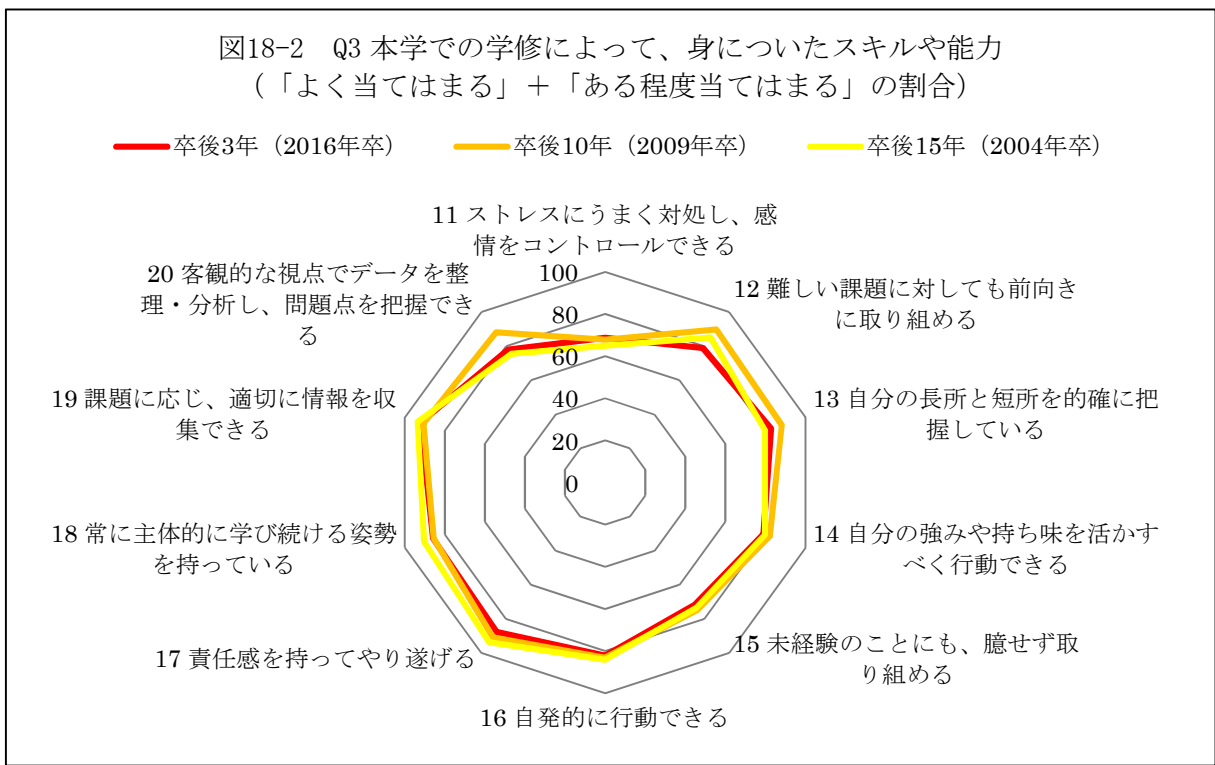
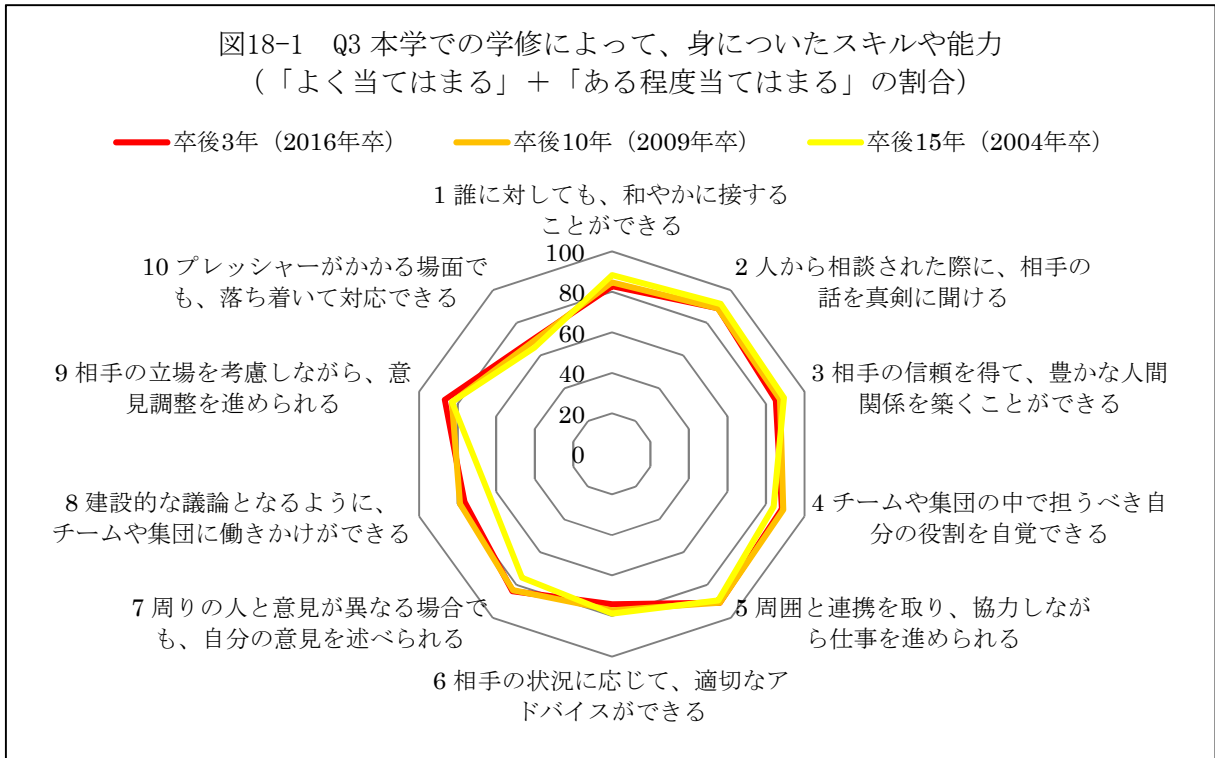


図18-3 Q3 本学での学修によって、身についたスキルや能力
 (「よく当てはまる」+「ある程度当てはまる」の割合)

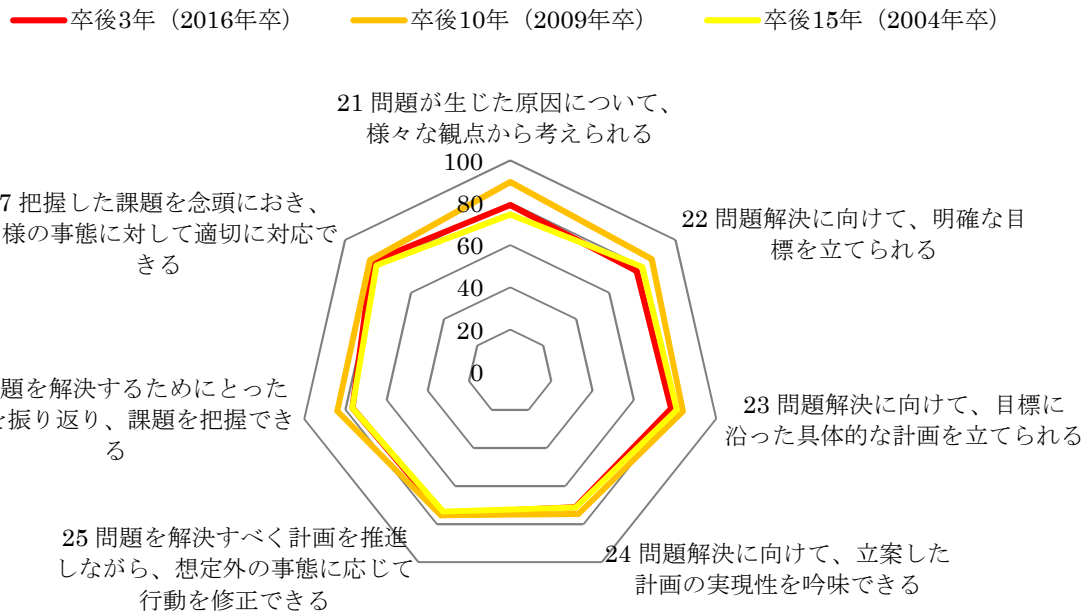


図19 Q4 本学での学修によって、身についた能力や姿勢
 (「ある程度当てはまる」「よく当てはまる」の割合)

